

「自分らしく 人とともに 今を生きる力を」

～ 特別支援学校のキャリア教育 ～

渡辺 三枝子 Ph.D.

筑波大学名誉教授、筑波大学大学研究センター客員研究員

1943年生まれ。米国ペンシルバニア州立大学大学院博士課程修了

「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」代表など歴任



はじめに

私の専門は特別支援教育ではなく、カウンセリング心理学です。日本では発達障害などの問題をかかえる生徒を学級担任ではなく臨床心理のカウンセラーにまかせるなどと考えられがちです。

子どもたちが学校にいる時期というのは、とても大切な時期で、その学校を通して、子どもたちが成長・発達する時期だといえます。特に、小学部期、中学部期はさまざまな子どもにとって重要な時期で、伸びる時期といえます。その大切な時期だからこそ学級担任とカウンセラーが一緒になって教育を行うことで学級の中で少しでも伸びていくこと、そしてその子が伸びていくことで他の子どもたちにとってもプラスとなるよう縁の下で支援したり援助することがカウンセラーの役割だと考えています。

このような意味で私は特別支援学校の先生たちのお仕事に一番感銘を受けています。特別支援の先生方と話している中で私自身が学ぶことが多く、自分の視野も広がり、自分が少しでもお役に立てることがあるのだと気づかされました。

また、小・中・高の大切な時期にかかわっておられる先生方とお互いに高め合っていくことで自分の専門が生かせていると考えています。そんな特別支援の先生方と私がかかわることができたのはキャリア教育という言葉を通してです。

私は大学教員になる前、今でいう厚生労働省の研究機関にあり、障害者が働くということ、学校から社会に入っていくということ、障害者支援、障害者雇用率を上げるなどという研究にかかわってきました。障害のある方々が社会で働くということは社会が変わらないとどうしようもないけれども、同時に一人ひとりの方々の、本人、保護者、雇用者や地域の人々みんなが共同作業をしなくてはならないと考えていました。そして特別支援学校のキャリア教育で皆さん方と出会うことができ、大変勉強になりました。

1. キャリア教育の誤解・混乱

文科省がキャリア教育を小学校に導入するとしたとき、神奈川県のある小学校から「これ以上また〇〇教育というのを入れるのですか。国際協力教育、英語教育、なんとか教育などで研究主任はお手上げです。肝心の教科教育がおろそかになってしまう、おかしいのではないですか。」という連絡を受けました。私はその学校に行って話し合い、誤解がとけました。それは、キャリア教育という言葉に誤解があるということが分かりました。「進路指導や職業教育の新しい言葉」、「キャリアについて教える教育」というように、「キャリアについて教える教育だ」と理解されたのです。

私のアメリカの指導教授は世界的にキャリア教育が広まっていくきっかけをつくっ

○ 渡辺氏の専門はカウンセリング心理学、職業心理学で『オーガニゼーショナル・カウンセリング序説』（編著、ナカニシヤ出版、2005）、『キャリアの心理学』（ナカニシヤ出版、2003）、『キャリアカウンセリング入門』（ナカニシヤ出版、2001）など著書多数。

○ 以前からイベント的に職業に触れる体験を多くしたり、外部講師を招いたりなど、自己流解釈でキャリア教育を行う誤解や混乱が起きていると指摘されている。渡辺氏は「就職力をつける教育」、「将来設計をさせること」などが誤解の代表的なものと指摘した。

た先生でした。1960年代のアメリカは日本より早く機械化やインターネットなどの情報化が進んだ時代でした。しかし、実は子どもたちの発達が遅れていて、義務教育が終わって社会に出ても、とても社会に通用する人間ではないとの認識でした。16歳の時期というのは身体的には大人であるけれども社会性の面ではそれほど発達していない。それなら学校教育の中で社会性の最低ラインのところまでは育てなくてはならないという問題意識がありました。しかし、「キャリア」という言葉を使ったためにアメリカでも混乱が起きました。

1970年代にキャリア教育をある先生が日本に輸入したときはあまり混乱が起きませんでした。2、30年たった今、日本に混乱が起きているのです。「訳のわからないキャリアという言葉がいけないんだ」と疑問視されました。それ以後、アメリカでも長い間、「キャリア」という言葉を嫌ってきました。ただ、国の予算がたくさんつきました。そして、「学ぶことから社会に移行する機会(チャンス)をたくさんつくみましょう」という法律ができました。

このような中で、私も「キャリア」という言葉が好きではなかったのですが、文科省との関係でやらざるを得なくなりました。

2. キャリア発達の視点で教育を見直す

キャリア教育の授業参観で学校に訪問させていただいたとき、偶然、特別支援学級の授業を参観したことがありました。調理室に一人の女の子と先生一人がいて、調理学習でパンケーキを焼くというしごとをするという授業でした。

案内していただいた校長先生からは「前はできなかったが、今は自分一人で調理室の鍵を借りに来て、鍵をあけられるようになりました。ただ、この子は重度のダウン症で言語は出ません。」と聞きました。

担当された先生は、「今では自分でつくったパンケーキを校長先生のところまで運んで食べてもらえるようになったんです。今日は材料を準備するところから焼き上がるまでのまとめの学習です。」と言われました。しかし、「玉子は自分では上手に割れないので先生が割ります。この子が割ろうとすると玉子がつぶれて手や服が汚れてしまうのです。」と、その子の前で話されるのです。

しかし、私が参観していたら、その子が玉子を何回か触るので、私は「自分で割りたいのではないのかな。」と思い、担当の先生に「私が彼女の手を持って一緒に割らせてください。」とお願いしました。彼女と私が一緒に玉子を割ると、少しグチャツとなりましたが、手を汚さずに割ることができました。そのとき、彼女が大きな叫び声をあげました。私はその声が恐怖ではなく、できた喜びの声に聞こえました。その後、フランス料理のシェフをしている彼女の親御さんが、「娘が家で皿洗いを手伝うようになりました。将来この子は調理場の手伝いという職業につけるかもしれません。」と話しているのを校長先生から聞きました。

私は彼女が家に帰って皿洗いの手伝いをし出したということは、調理について関心を持ち、分かってできたということなのだと考えました。学校での日頃の活動や取り組みが、子どもたち自身の将来を考えることに役立てれば良いなと思いました。もちろん、小学校ですから自分の進路を決めるということではないのです

○ 渡辺氏は、文部科学省の中央教育審議会教員養成部会専門委員、キャリア教育・職業教育特別委員、「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」代表などを歴任。

○ この間の渡辺氏などの問題提起で日本のキャリア教育のとらえ方が変化してきている。しかし、実施者である私たち教員の受け止め方や実践の内容・水準にばらつきがあることが課題とされている。

○ 平成23年1月の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」では、従来までは「仕事に就くこと」に焦点をあて勤労観、職業観が重視され、社会的・職業的自立が軽視されたという課題の下、従来の「4領域8能力」から社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力(「基礎的・汎用能力」)への転換という「新たな方向性」が提案された。

○ コンピテンス (competence)
キャリア教育では訓練によって得られるアビリティ(能力)ではなく、コンピテンスという言葉が用いられている。渡辺氏は「できるかどうか」、「可能性はあるかどうか」ではなく、「一緒に努力すればできるようになる」という育成の姿勢 (competency) が大事と述べる。

が、子どもたちがさまざまなことに関心を寄せることで将来、親と一緒に進路について考えることができるようになるのではないかと考えました。校長先生もキャリア教育はこのような意味があるのですねとおっしゃって、3年間のその学校なりのキャリア教育に取り組みました。

だからといって、今までやってきた教育を、ただ繰り返すだけでなく、「この学校の子どもたちは将来どのようになってほしいのか」ということを考え始められました。そして、その学校の子どもたちの実態を地域の人々や進路先の中学校に聞き、「その前に小学校でできることは何か」ということを考えられました。その結果は、「みんないい子だが、自分から何かを言えない。自己表現がうまくできない。」ということだったそうです。

このことでキャリア教育3年間の実践目標を「自己表現ができる子どもにしよう」と決められました。各学年毎のそれぞれの教科の授業で「自己表現の力を育てる」ことを目標に取り組みました。「パンケーキの授業を受けた女の子が、自ら、好んで家庭で手伝いをするようになった。」ということは、障害のある彼女が学習の中で自己表現の力が育ったと考えられるのではないのでしょうか。

それぞれの地域で、それぞれの状況に合わせて、先生方ができることを考えて、いままでやっていたことを、ちょっと改めたり、視点を変えたりすることが大切だと考えます。そして、全教員が同じ方向に向かえばきっと何かがあるのではないかと考え、キャリア教育とはこのような意味があるのではないかと考えました。

「将来、子どもたちが自立的に生きていくために」と言われるが、18歳になったら急に自立的に生きていくという人はいません。大学を卒業しても自立できない人はたくさんいるから就職もうまくいかない。確かに、「自立する力を育てる」という思想や理念が日本の教育の中で消えてしまっていたのではないかと思います。

このことから私自身が反省させられ、自立を援助するのではなく、学校教育の時期に最低身につけておかなければならない能力、知識、態度などを子どもたちが身につけていれば、将来そのことを発展させて生きていくことができると考えました。

3. 子どもたちは「人とともに」発達する

「自分で玉子を割る経験があったから家で皿洗いの手伝いを始めた」という因果関係は分かりません。しかし、「重いダウン症だから言葉が分からない」と、どうして分かるのでしょうか。言葉の表現は違うかもしれない。喜びを表す言葉は違うかもしれない。けれども私たちの言葉が分からないとは思いませんでした。しかも、その子の前で先生たちが「分からない」と話すということが理解できませんでした。向日が丘でも言われているように、「人とともに生きる」の中に教員も入っていなければいけません。同じ日本語を使っても分からないかもしれない、違う表現の仕方をしていても分かっているかもしれない・・・。

発達障害の東田直樹さんの本を2, 3冊買いましたが、1冊目を少し読んだだけで私がつらくて読めていません。ありがたくて「ありがとう」と言いたいものだけでも表現の仕方が違い、一般社会に受け入れられない表現なので「ありがとう」と伝わら

○ 向日が丘ではH24年度から進路指導部を中心に、「卒業生の姿や進路先から学ぶ」という全校研究会や学部研究会を行った。

○ キャリア教育はキャリア発達の視点で授業を見直すこと

○ 東田直樹「自閉症の僕が跳びはねる理由」エスコアール出版部など著書多数
会話のできない重度の自閉症者。自閉症、絵本、詩集など14冊の本を執筆。東京大学、福岡女学院大学ほかで講演会を開催。パソコンおよび文字盤ポインティングにより、援助無しでのコミュニケーションが可能。

ない。伝わらないから結局、暴れたりする。しかし、東田さんがパソコンで書くようになってから私たちが理解できるようになったのです。だから日本語だから通じ合う、単語の数をたくさん知っているから通じ合うとは思わないのです。

ある高等学校を訪問したら、いつでも誰にでも「ありがとう」と言う生徒さんがいました。私が、その生徒さんに「何に使うの？」などと尋ねても「ありがとう」と言うだけでした。でも、知的障害の友だちがそばに来て、「ちがうよ、何に使うか聞いているんだよ。」と言うと、ちゃんと「これはプランターだ」などと答えていました。私たちはすぐに知的障害だ、自閉症だとカテゴライズしてしまうけれども、子どもたち同士ではちゃんと通じ合っている。知的障害の生徒が私に通訳してくれると、自閉症の生徒もそれを受け止めて答えてくれました。

また、違う学校では知的障害生徒と車椅子に乗っている自閉症の生徒がペアになって学校中をまわって先生から注文を受けていくというコミュニケーションの学習をしていた。このときも車椅子を押していた知的障害の生徒と自閉症の生徒同士が会話して通じ合っていました。

私たちは良かれと思って障害など、病理的なカテゴライズで子どもたちを見てしまいがちだが、実は障害のある子どもたちの他の可能性をつぶしていないのかと思います。子どもたちの間では障害種別と言うより、「仲間」として話すことができているから通じ合うことができるのだと考えました。

ある校長先生は、私を案内している途中でも子どもたちに声をかけていらっしやう。私と話している間でも校長先生の目は子どもに向いていました。このような日常的なつながりこそ大切だと考えます。子どもたちと日常的に、何でもないことでも声をかけ合っていくことが大切だと思います。

若い先生方は、授業の中ではしゃべっても日常の会話が少ないのではないかと思います。授業の中でも、そんな言い方をしたら伝わらないのではないかとか、黒板の書き方もどうかと基本的なことを感じることもあります。障害がないにかかわらず、「この年齢の子どもに分かる言葉と、分かる教材をどうして使わないのか」と思います。パワーポイントを使えば字はきれいだし、見て分かるし、音も出ていいのではないかと言われますが、私は何か違うと思うのです。私たちから見ると、子どもが何かを書いているときに、その子の速度に合わせて何かを見ている、考えているときなのだと思います。それなのに、今は書いたものをパッと黒板に貼ってしまったら、パワーポイントで見せたりする。勉強するってそのようなことなのかと考えさせられてしまうときがあります。

特別支援の授業を見せていただくと、ちゃんと子どものペースに合わせて授業がされています。教育の原点が特別支援にあるなと感じるのです。

4. 「自分らしく生きる」ために「つけたい力」とは

キャリア教育は、「子どもたち一人ひとり、いずれどのような形であっても自立する。」ということを重視します。自立とは経済的自立だけではありません。たとえ重度の障害で寝たきりで医療の世話になっていても精神的には自立する。これはまさに向日が丘の研究テーマである「自分らしい」という言葉につながります。

○ 向日が丘の全校研究テーマのひとつ、「自分らしく生きる力」は、障害があってもひとり一人がかけがえのない人生をより豊かに生きるという意味が込められている。

さらに、本人の「願い」を大切に、「主体的に」社会自立、職業自立を目指すという、誰もが生まれながらに持っている人間としての普遍的な成長・発達の可能性を示す。

具体的な授業の中では、障害があっても「より自分らしく」学習でき、「できる力」を伸ばすことを大切に研究を進めようと話し合った。

文科省の教育改革ではこれまで「生きる力」や「ゆとり教育」など、いろいろなことが言われてきました。「ゆとり教育」を考えた文科省の課長さんは「何でも覚えさせればものが分かるというものではない。一つのことをじっくり考えるゆとりがあれば人間の考えていく力や記憶する力が伸びていく。」と話された。私は、「ちょっと待ってください、ゆとりを上手に使える教員が育っていないとダメなんじゃない。」と言いました。子どもたちが、「なぜ・・・」、「違った答えが出た・・・」、「今まで考えたことない・・・」、「わからない・・・」と言ったとき、どう対応するかという力を今の教員は持っていない。大学でもいちいちパッと答えが出せないとダメだというような教育しか受けてこなかった教員にはゆとりを生かす力はないのではないかと思います。日本の教育は理念と教育現場の差があるなと思いました。

「生きる力」も同じです。本来キャリア教育は「生きる力」と同じです。ところが実際に「どうするの」が出ていないのです。子どもたちが弱くなって「いじめ」や「自殺」が増えているという社会的な批判が出てくると、「生きる力」をつけましようということになります。すると学校現場は「どうしたらいいの」となります。そしていつの間にか「道徳教育」が入ってきます。道徳の基本理念は「自分や他者の人権を尊重すること」で、キャリア教育同様、教え込むものではありません。これがまた学校現場では「どうするの・・・」という混乱を生むことになります。

私は、キャリア教育は「学校教育でなければ育てられないこと」をする教育だと考えています。年齢的にいうと小学・中学の子どもたちはまだ自立していない時期で、知力、情緒、社会性などさまざまな能力が発達する段階です。このような能力を発達させるという視点を持って教育を見直すということが、結果的には自立につながるのではないかと考えます。

自立とは自己責任を負いながら社会で生きていくということですが、人に頼らない、人の世話を受けないということではない。お互いに共存し合うということです。これが向日が丘の「人とともに生きる」という意味合いになります。

子どもたちは学校という安全な社会の中で力がつくチャンスはたくさんあるでしょう。そのために教科教育や特別活動があります。先生方にとっては当たり前のことでしょう。しかし、この当たり前のことを具体的な学校教育の場面で、どのように教えたらいいいのか具体的に考えるとところに焦点を置かない限り、「ゆとり」や「生きる力」と同じようになってしまいます。これを考えるのはプロとしての教職員集団です。特に日本の教育で忘れられてきた社会性や情緒性を育てるといふ点では授業・教育実践で何が育ったのかを体系的に明らかにする必要があります。このことが今、キャリア教育を取り組む意義として考えています。

頭で分かったからできるのではなく、実践しながら、失敗もしながら、徐々に体験的に獲得していくのが「つきたい力」なのではないでしょうか。発達というのは段階を踏んで成長していくということですが、それを意識的に積み重ねていくことは学校教育でしかできないことです。発達は年齢がきたから育つというのではなく、その時期の発達の課題を達成しながらその力を広めたり、深めたりできるということです。学校時代の6年間、12年間のプロセスを仮説であっても示しておかないとだめなのではないかと思います。

○ 文科省「ゆとり教育」は、2002年度からの学習指導要領による教育。しかし、1992年度からの新学力観に基づく教育、および1980年度からの教育もゆとり教育であると定義することもある。

その内容は、知識重視型の教育方針を詰め込み教育であるとして、学習時間と内容を減らし、経験重視型の教育方針をもって、ゆとりある学校をめざした。渡辺氏はかつての「知識重視型」の教育を受けてきたのが当時の教員たちではないかと指摘をした。

○ 2011年以降実施の学習指導要領では、ゆとりでも詰め込みでもなく、「生きる力」をよりいっそう育むという方針に変わった。1996年の文部省中教審が「いかに社会が変化しよう、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力が必要。また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性やたくましく生きるための健康や体力が不可欠。こうした資質や能力を、「生きる力」とし、変化の激しいこれからの社会に向け、バランスよくはぐくんでいくことが重要であるとした。

○ 将来に向けての子ども(保護者)の思いや願いの育ち、単なるスキルの習得にとどまらない子どもの内面を育てようという視点が不足していないか。花熊 暁(愛媛大教授・付属校長)「進まぬ、個別の教育支援計画に迫る」

5. 学校、教室は安全な社会 子どもたちの社会性や情緒性を育てる

通常の小学校での話ですが、友だちをいじめたり、友だちからいじめられたりする子どもがいました。その子は頭が良くて友だちがバカに見えてならない。でも算数だと答えが正確に出てくるからいいのだけれども、国語の感想文のように模範解答はあっても必ずしも正解がないという学習があります。その子は国語の時間になると暴れる。友だちにちょっかいを出す。だからいじめっ子いじめられっ子、孤立している子なんです。みんなが詩を読んだ感想を言うという授業でした。その子はいやいやながら自分の感想を言いました。そしたらその感想はみんなが言った感想と全く違うものでした。先生は困ったのですが、「よく言えたね。偉いね。」と褒めました。でも、授業が終わった後、クラスの友だちが「すごいね、僕の感想と全然違う」、「私の感想と違うけど、そんな感想もあるよね」、「とっても参考になった」などと子どもたち同士で評価し合ったんです。先生がこのことを伝えるとその子のいじめがピタッと止まったという話を聞きました。他の子どもたちも影響を受け合って「ものの見方というのはいろいろある」と気づいたのです。先生も感想文を書かせる意味をもう一度考え直す機会になりました。

一つの授業の経験が国語の学習だけではなく、社会性の学習にもなる。このように授業や学習、教育課程というもの子どもにとっては教育の中核になるものです。学ぶということが負担でもあるが喜びでもある。友だちと違うことを言うことは怖いことである。でも、先生が正しく評価すると子どもの自信にもつながる。他の子どもたちもそのことから学びます。

LDの子どもは国語の本を音読するときに助詞を抜かして読んでしまうことが多いですが、先生がする指導の姿を見て子どもと一緒に教える場面を見たことがあります。その子は家に帰っても親と一緒に音読の練習をするようになります。子どもが子どもに教える、先生の姿を見て子どもたちが子どもを助ける・・・、この姿を見て私は驚きましたけれども、このくらい学校の教室というものが社会的に力を持っています。

特別支援学校では子どもたちのさまざまな状況に応じた先生方の配慮が必要な学校ですが、子どもたちにとっては学校が大切な社会なのです。ですから学校が安全な社会でなくてはならないのです。ともすると学校は「できる・できない」と評価される場になってしまうことがあります。でも、本当は学校は知識だけでなく社会性を学ぶ場なのです。これが向日が丘の全校テーマ「自分らしく人とともに今を生きる力」です。言い換えればまさにキャリア教育なのです。もちろん、何を研究するかは先生方で決めなくてはいけないのですが、学校というのは一つの社会です。子どもたちが安心して生きられる社会だからこそ学ぶチャンスがある。学ぶ喜びもあり、発達も促していくのではないのでしょうか。

- 教師の価値観からの「つきたい力」から、子ども自身がその子なりに主体的な意志で自分の生活の中で現実的な必要感を持って発揮したい、生き生きと活用したいと思える力への価値観の転換が必要。教師の観点で語るとすると子どもの思いに寄り添い「発揮してほしい力」と考えることが求められる。

（「生活中心教育とキャリア教育」名古屋恒彦）

- 渡辺氏は、「社会が自分とは異なる多様な人からなり、共生し、共に助け合うことで幸せになれる。他者なくしては生きられない」ことを日常生活で経験する必要があると述べている。その上で、子どもたちにとって学級は「小さいながらも社会」であるとし、「人と人をつなぐ」経験の場として生かすことが大切であると述べた。さらに、地域の人々、保護者などとの「つながり」を強めることも大切であると述べている。

（「今とつなぐはキャリア教育のキーワード」渡辺三枝子）

- 「子どもを指導・訓練してできるようにするのではなく、できる状況をつくり、できるようにする」と理解することが重要。授業では、周囲の支援条件を整えて「できる」状況をつくりだすことが必要。

（「生活中心教育とキャリア教育」名古屋恒彦）

6. 「人とともに生きる」ことが「自分らしく生きる」をつくる

ただ、「自分らしく」という言葉は易しいようで難しい言葉です。下手をすると孤立した考え方になります。他者があって初めて自分らしさ、特徴が見えてきます。他者の存在、学校の場合、その多くは先生や友だち、仲間ということになります。先生や友だち、仲間という存在を通して自分を知っていく、そのときに私たち教員が人とともに成長していく子どもたちの変化、つまり発達を見ていくことが大切です。発達は放っておいては生まれません。学校は家庭ではできない子どもの状況に合った教育ができる場です。その教育は知的なもの、社会的なもの、情緒的なものもあります。これを通して「自分らしさ」が見えてきます。「人とともに生きる」ということが、ただ社会性だけではなく、「自分らしく生きる力」を作っていくことになります。自分らしいことを見つけていくことは自信につながっていくということになります。障害があり寝たきりで「できない」こともあるけれど、「役に立っている自分」がいるという自信につながっていくものだと考えます。

ロサンジェルスで養護教員の働き方を研究していたとき、ある部屋に案内されました。そこにはスクールナースがいて3人の寝たきりの子どもがいました。私は「この子たちは病院や家庭にではなく、学校にいるのですね」と聞きました。そしたらスクールナースは「当たり前です。この子たちは義務教育の段階の子どもたちですから。」と答えました。そうしているうちにドヤドヤと子どもたちが入ってきて、それぞれの子どものベッドサイドで「今日はこんな勉強したんだよ」、「こんな出来事があったんだよ」と話し出しました。私はこのとき「寝たきりでいる子どもたちの存在価値」ということを考えていました。これは「人とともに生きる」ための大切な教育になっていることを知りました。病弱や寝たきりの人々がいるから社会の一部が見えてくるという大切な存在価値があると学びました。そして本人にとっても学校にいるということが自分の存在価値となって、周りの子どもたちにもプラスになり、社会的に大きな意味のある仕事をしているんだなと思いました。「人とともに生きる」ということは自分にも他人にも役に立つということです。どんな障害がある子どもたちも学齢期にこのような体験をしていくことが大切なことだと考えました。

今、地域のさまざまところで高校性などが花を作ったり植えたり、スーパーマーケットで売ったりする姿があることをご存じだと思います。地域の人々から「よく頑張っているね」と言われて初めて農業の価値を知ることになります。地域の人々に「ありがとう」と言われることで子どもたちの学習意欲が高まっていくことになります。地域の人々とともに生きていくということが学齢期の子どもたちにとっても生きる力になることを表しています。キャリア教育と称して将来の自分の計画を立てるとか、自分に適した仕事を探すということではなくて、社会の人々とともに活動することで自分の存在価値を知っていくということが大切で、機会をつくるのは学校で、子どもたち自身が自分の存在価値が分かるように指導していくことが大切です。

- 「自己肯定感」という言葉が使われることが増えたが、その概念は明確に規定されていない。「自分のいいところを評価して自己を肯定するような意味」で用いられていることもあるし、「存在レベルで自己を肯定する意味」で用いている場合もある。私は後者の意味で使う。

高垣忠一郎（立命館大）



7. 過去の体験や授業を今につなぎ、今を大切に生きる

私は今日、参観させていただいたの授業の中で、博物館の見学の話がされていました。先生は「先週、博物館に行ってきたんですねっ！」と何回かおっしゃいました。私はこれがとても重要だと思います。教育というのは、カリキュラム通りに次から次へと新しいことをするのではなく、子どもが過去に体験したことを子ども自身が「ふりかえれる」ようにすることが次の続きの勉強を意味あることにする、やりがいを持って取り組めるようにすることがとても大切だと思っています。知識を思い出すのではなく、経験した意味を思い出すことが大切です。

「キャリア」の概念のとても重要な要素は、私たちは過去、現在、未来の時間の流れの中で生きている。でも、絶対に現実「今」なのです。今やれることをきちんとやらなければならない。博物館に行った日は「今」ですが、時間がたつて一週間たつとそれは過去になります。過去になった経験を放っておくのではなく、今日の授業でもう一度思い出すことで学習につながります。そのことで学びの連続性が子どもたちの中で意識できるようになります。このようにして能力は育っていきます。「キャリア」という言葉をいまだに残していることで良いのかなと思うことは、「ふりかえる」という人間独自の行動が教育にはとても大切なことだと思うからです。先週、博物館に行った自分だということをつりかえることで、それが今の学習につながっていると知ることは過去を生かすということですが、とても大切です。経験のつながりとしての「今」を意識させるということが「キャリア」という言葉なのです。ですから、今日参観させていただいた先生は、すでにキャリア教育をしているということになります。

過去にできなかったことが今できるようになることがあります。私が教員だった頃、英語が苦手な生徒がいました。その子に誰かが単語の覚え方を教えてあげた。すると次の日、英語のテストで良い点が取れた。そのことを英語担当の先生に話したら「そりゃ、まぐれだ。」と言いつつ放った。私は「こりゃ、だめだ」と思って、その学校を辞めてしまったんです。

子ども時代というのは、ちょっとした経験でも先生との接触で変わることもあるし、良かった経験から自信がつき、さらに良い学びができる子どももいます。

「キャリア」というと未来を計画することと思いがちですが、私たちは過去、現在、未来とつながっている中で生きているが、未来というのはまだ来ていないし、明日があるかどうか分からない。未来は「今」の結果としてある。だから「今」を充実したものとしましょう。でも実は「今」を充実させるのは過去のことを思い出して今と関係づけて考えることが大切ですよということなのです。「過去に分からなかったから今たずねてみよう・・・」、「過去がつまらないものだったから今、楽しもう・・・」など、過去の自分の経験が今の自分とつながっているということで、「今」やらなければいけないことがあるということを知ることがあります。このような理念が「キャリア」という言葉の中にあります。

先生方はいろいろ工夫して授業をされています。しかし、何を教えるかということより、一人ひとりの子どもがその授業をどのように取り組んでいるのか、授業の継続性を意識しているかどうか、経験をつないで新たな学びに意欲的に取り

- キャリア教育は、「人は時間的広がり、空間的広がり、人的広がりの中に存在する」ことに注目するとし、「今の経験」の充実が未来の土台になるという意味で「過去の経験」、「今の授業」、「未来」を「つなぐ」ことがキャリア教育の実践で重要な視点であると述べる。

さらに、「今」取り組んでいる授業や活動をふり返り、授業のあり方を工夫し、達成状況から改善し、明日の授業を計画し直す姿勢が大切です。

渡辺三枝子「今とつなぐはキャリア教育のキーワード」(特別支援教育研究)

組んでいるのかなどということを考えて欲しいと思います。子どもたちの中で教育的に組織されたキャリアがつながっていくことで学びは深まります。人間関係も同じです。

8. 教職員が組織として力を発揮し、子どもへの教え方を変える

向日が丘ではもうすでにキャリア教育の理念にもとづいて教育が進んでいます。しかし、今まで通りに授業をやっていれば良いということではありません。なぜかという皆さん方は教える内容や教え方については、毎日いやというほど議論して授業を進めていらっしゃる。でも、その中で過去の学びの意味と今の授業がつながっているのか、それが真の学習となっているかどうかという点です。例えば、1年生ではこんな学習したね。2年生ではこんな学習をするんだよという学びをつなげてあげること。このことが向日が丘12年間の経験につながり、意欲もつながるのではないのでしょうか。

向日が丘のサブテーマで「ステージ毎に育てたい力を授業を通して考える」ということがあります。それぞれの授業でそれぞれの能力が獲得できるようになることが大切ではありますが、それを学んでいるのは一人の子どもです。そしてそのステージ毎に、確かに発達の度合いは違います。しかし、それよりも一人ひとりの子どもたちの経験が大切だと思います。ときどき、「小学校の時は何をしていた？」、「昨日はどうだった？」とふりかえることで経験や学習の継続性を持つことができます。

そして就職するときは必ずしも自分の行きたいところや学校で習った好きなことができるとは限りません。これは障害のあるなしに限りません。でも、そこで得られる経験というのは他では得られないかけがえのないものです。これは逆に言うと学校時代に好きなことができると思って就職しても全然違って離職することも多くあります。

好きだからするのではなく、好きになるためには経験が必要です。やってみたら好きになるのです。好きでも嫌いでも、できてもできなくてもさまざまな経験をするのが大事です。学校時代に頑張った経験と卒業後の経験をつなげて好きになっていくということが大切だと思います。いろんな経験が好きなものを見つける可能性を広げることになります。どうして好きになったのかも子どもたちに聞いてみるといういいですね。嫌いだけどやってみようかなという勇気や挑戦心につながるのではないかと思います。このように、学校時代から経験をつないでいくことで社会に出ても学校の経験が生かせるようになるのだと考えています。

このことは放っておいたらできません。私たちが意図的に子どもたちの知的経験や社会的経験をつなげる努力をしなければなりません。子どもたちの学習が少しずつでも前に進むように発達を後押しすることが教育であるといえます。このことは先生方の間でもっとコミュニケーションをとっていくことでやりやすくなる。「あの先生の授業でこんな勉強したのか。それならこの授業につながるよ。」ということができます。

高等学校の職場体験学習で先生が「仕事が好きか嫌い、ではなくて大人

○ キャリア教育を「トップダウンで研究を進める学校」と「ボトムアップで進める学校」があり、向日が丘は後者のほうではないか。そのとき、「新しいものではなく、昔から取り組んできたこと」、「今のままで良い」となると受け止め方に混乱が起きる。

○ ジョン・デューイ(1859年～1952年)は、アメリカの哲学者・教育思想家。代表的な著書「経験と教育」(1928年)で、教育と「経験」の間に何かしら必然的な関係があるという前提に基づいて、経験は時間的な連続関係をもつため、先行する経験は後続する経験の質に影響を与えざるをえない、という教育の本質論を展開した。

はなぜ働いているのか聞いてみたら」と言ったことで、生徒たちが修学旅行へ行ったときキャビンアテンダントにインタビューして修学旅行の学習発表をしたという話を聞きました。このように授業と授業をつなぐことで学習の広がりや深まりが見られるというのはキャリア教育の視点の一つです。

学校で行う教育はあまり「加える」ということを考えずに「ためて」いき、その体験を思い出し、振り返り、「今」につないでいく、子どもの中で体験が繰り返されるとということが大切だと思います。それが大人になり、自立していくときに大切な力となります。

そして他者というからこそ生きられる、自分とは違う他者がいるから自分が理解でき、自分らしく生きられる、みんな違うけれども助け合うことができるということがとても重要になるのではないのでしょうか。企業の方が、職業の能力より人間関係の方が大事ですとおっしゃるのは、このようなことではないのでしょうか。

キャリア教育は教育改革です。何を変えるのかというと「子どもへの教え方」と「教職員が組織として力を発揮するということ」です。向日が丘はクラスやグループでよく話し合われている学校ですから大丈夫だと思いますが、なるべく多様な集団で先生同士が話し合う、意見交換することを大切にして欲しいと思います。

子どもたちの発達を促す教育をするためには病状の変化や障害の状況、ICFなどで子どもたちの変化をとらえるというのは大切なことです。そのような過程を通じて、子どもたちの毎日の生活にある変化(発達)を集団的に読み取ることが大切です。子どもたちを一番見ているのは学校です。そして今日、集まっていたいただいた福祉関係者の方々です。時々子どもたちの関係者で観察する、見る、話し合うということが大切です。発達している最中の子どもを多面的に見るということが大切です。診断するというものではありませんが、子どもの変化をメモしておいて関係者でトータルに見て話し合うということが大切です。キャリア教育で強調していることは学校が持っている力を今よりも発揮させましょうということです。

私の今までの経験をお話しさせていただくことで向日が丘が取り組んでいる研究が前に進んでいけば良いなと思って話をさせていただきました。長い時間、本当にありがとうございました。

平成26年12月3日 全校研修会

○ 松栄堂 工場長の話

○ 渡辺氏は、「キャリア教育は、学校、家庭、地域の教育改革運動である」と述べる。

○ ICF (International Classification of Functioning, Disability and Health) 2001年の世界保健総会で、ICIDHの改訂版として採択し加盟国に勧告した「国際生活機能分類」

